



早稲田大学ビジネススクール
准教授
牧 兼充

169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
03-5272-1632
kanetaka@kanetaka-maki.org

2019年2月21日

2019年度「科学技術とアントレプレナーシップ」の授業を開始するにあたって

授業の履修を検討中の皆さんへ:

「科学技術とアントレプレナーシップ」の授業へようこそ。この授業はWBSの数ある授業の中でも、最も負荷の高い授業です。授業の負荷が高いことで有名なあの根来先生が、「この授業は自分の授業よりも負荷が高い」とおっしゃっています。夜間主プログラムで、働きながら、場合によっては家庭と両立させながら、この授業で求められることを達成するのは至難の技だと思います。なぜ、このような授業を僕が設計しているのか、授業が始まる前に僕の「授業設計にあたっての哲学」をお伝えしたいと思います。

この授業では毎週6本のアカデミックな英語の定量研究論文をカバーします(事前予習は各自そのうち1本で良い)。この論文は私が厳選したもので、この研究分野における、世界最先端の「知」が詰まっているといっても過言ではありません。この授業ではこれらの論文を「私が解説する」するスタイルではなく、「皆さんが自分で読み込んで発表する」スタイルをとります。米国の博士課程の1、2年のコースワークで行われる、「セミナー・スタイル」と呼ばれるものです。

なぜ、僕が解説するスタイルを取らないのか、そこに僕自身の「哲学」があります。ビジネススクールにいる2年間、皆さんは色々な授業を履修し、最先端の理論を分かりやすく解説してもらうことができます。でも、卒業後は、そういった分かりやすく教えてくれる人は存在しません。僕は、WBSの皆さんには、誰かから教わるのではなく、自分で学ぶ力をつけて卒業して行って欲しいのです。そのためには、世界で先端的なアカデミックな論文を自分で読み込む力はとても有益です。開発経済の分野では、発展途上国の人へのサポートとして「魚を提供するのではなく、釣りのやり方を教える」ことが大切と言われています。この授業で目指していることは、皆さんに「知識」を提供するのではなく、「知識を獲得するスキル」を提供したいのです。

この授業では、定量論文を英語で読みます。なぜ定量論文を特に扱うかという点、少なくとも僕は色々な研究分野の中でも、定量研究が最も「科学的思考法」に基づいた研究スタイルであると考えているからです。「科学的思考法」というのは、データの中から「因果関係」を推論するプロセスのことをさします。世の中に出回っている統計情報は必ずしも「因果関係」と呼べないものだらけです。どういう情報を信頼して、どういう情報を疑うべきなのか、その判断に必要なのが「科学的思考法」で、それを学ぶ一番の手法は、定量研究をたくさん読むことなのです。

更に、皆さんに自分の「実力」を再確認してもらいたい、と思っています。WBSの夜間主プログラムにくるまでの間、皆さんは色々な人生経験を積まれていると思います。そして多くの人は、それなりに要領よく、色々な実績を出してきたのではないかと思います。でもおそらくこの授業は、「要領よく」乗り切ることはできません。今まで、学んできたことの総量が、そのままこの授業の理解力に繋がります。「実力」という言葉を仮に、「これから新しいことを学ぶ際に、より短い時間で身につけられる力」と定義したとすると、この授業では確実に履修者の間で実力差が大きく出ると思います。ぜひ皆さんに自分の「実力」を認識していただいて、自分に足りないことは何かに気づいて欲しいと思います。人生の前半は、「要領の良さ」である程度乗り切れると思うのですが、人生の後半はもっと本質的な「実力」を身につけることが大切と思うのです。

最後に、優れたアカデミックな理論は、実践に直接的に役立つんだ、ということを実感して欲しいと思っています。この授業では、論文を読んだ後に毎回必ず、この理論は実践にどう役立つのか、ということ深く議論します。「理論を理解する力」と「理論を実践に活用する力」は二つ異なるものです。理論の抽象度をあげて、別の状況でその理論をどう活かすことができるのか、この力を、ぜひ皆さんに身につけて欲しいと思っています。WBSの標榜する”Actionable Management Knowledge”とは何かをぜひ皆さんと一緒に考えてみましょう。



「この授業における学びの深み」 = 「今まで学んできたことの総量」 × 「今どれだけ時間を割いて学ぶか」

この授業でどれだけ学べるかは、「今まで学んできたことの総量」と「今どれだけ時間を割いて学ぶか」の掛け算です。もし過去に学んできた量が少ない人は、今より多くの時間を割いて学ぶしかありません。この方程式を迂回する方法は存在しないと思います。おそらく皆さんにとって、ビジネススクールの2年間というのは、人生で最後に「学び方を変える」ことを教わる機会なのだと思います。ぜひその機会を皆さんに提供したいです。

ビジネススクールの授業ですので、僕は皆さんに「プロフェッショナル」としての行動を期待しています。この授業では、「今、この瞬間に、あなただけに提供できる価値」を生み出すラーニング・コミュニティとなるための工夫をあらゆる形で準備しています。あらゆる意味で、「プロフェッショナル」とは認められない行動には、僕は寛容ではないと思います。「アン・プロフェッショナル」な行動は、ラーニング・コミュニティにおいて他者の学習を阻害します。ぜひ、コミュニティの一員として、WBSの理念である”responsible leaders”としての姿を高い水準で求めます。なお、この授業の間に、家族(もしくは significant other を含めた大切にしている人たち)の事情で、思ったよりも時間が割けないと言ったことも発生するかと思います。もし家族の事情で時間が割けないときは、僕を含めた履修者コミュニティで、相互にサポートして行くことも、大切な”responsible leaders”のあるべき姿と思っていますので、ぜひ皆さんご協力下さい。

この授業の理念を実現するためには、僕自身にも大きな責任を伴います。この授業での目的を達成するために、授業の準備をしっかりと臨み、また授業時間の価値を最大化するために、議論のファシリテーションを高い水準で行うように努力します。授業時間外でも、履修者から求められたら、可能な限りサポートを行います。皆さんがしっかりとコミットしたにも関わらず、もし学ぶものが少ないとすれば、それは履修者の責任ではなく僕の責任です。

この授業は、2018年度春学期にティーチング・アワードをいただきました。その時のスコアは、「総合的に見てこの授業は有意義でしたか」は6点満点で6.0、「この授業をよく理解できましたか」は6点満点で5.1でした。今年度の授業では、この満足度と理解力のギャップを埋めること、つまりより多くの皆さんに「理解」の水準を上げることが僕自身の大切な目標です。

この授業で僕が期待することをしっかりと皆さんに示した上で、この授業の趣旨に合う方が履修して下さることを強く望みます(ぜひしっかり考えて下さい)。教員の評価は、履修した人数でも測られます。特段の理由がない限りは、どうか聴講ではなく、履修していただけると嬉しいです。

授業のゴールが「プールの向こう側に泳いで行くこと」だとすれば、この授業で皆さんが体験するのは、「濁流に流されて溺れながら向こう側にたどり着いた」というような感覚なのではないかと思います。4月からの8週間の授業をご一緒するのを楽しみにしています。

牧 兼 充